

和辻哲郎

岡倉先生の思い出

岡倉先生の思い出

今度岡倉一雄おかくらかずお氏の編輯で『岡倉天心全集』が出始めた。第一巻は英文で発表せられた『東洋の理想』及び『日本の覚醒』の訳文を載せている。第二巻は『東洋に対する鑑識の性質と価値』その他の諸篇、第三巻は『茶の書』を含むはずであるという。岡倉先生の主要著作が英文であつたため在来日本の読者に比較的縁遠かつたことは、岡倉先生を知る者が皆遺憾としたところであつた。今その障害を除いて先生の天才を同胞の間に広めることは誠

に喜ばしい企てであると思う。

岡倉先生が晩年当大学文学部において「東洋巧芸史」を講ぜられた時、自分はその聴講生の一人であった。自分の学生時代に最も深い感銘を受けたものは、この講義と大塚先生の「最近文芸史」とである。大塚先生の講義はその熱烈な好學心をひしひしと我々の胸に感じさせ、我々の學問への熱情を知らず知らず^{あお}に煽り立てるようなものであったが、それに対して岡倉先生の講義は、同じく熱烈ではあるがしかし好學心ではなくして芸術への愛を我々に吹き込むようなものであった。もちろん先生は

芸術への愛を口にせられたのではない。ただ美術史的にさまざまの作品について語られたのみである。しかし先生がある作品を叙述しそれへの視点を我々に説いて聞かせる時、我々の胸にはおのずからにして強い芸術への愛が湧^わきのぼらずにはいなかった。一言に言えば、先生は我々の内なる芸術への愛を煽り立てたのである。これはあの講義の事実的内容よりもはるかに有意義なことであったと思う。

先生の講義が右のごとく我々を動かしたのは、先生が単に美術品についての事実的知識を伝えるにとどまらず

して、さらにそれらの美術品を見る視点を我々に与え、美術品の味わい方を我々に伝えたがためであつたと思う。この点において先生は実に非凡な才能を持っていた。今でも自分は昨日のことのように思い起こすことができ。シナの玉についての講義の時に、先生は玉の味が単に色や形にはなくして触覚にあることを説こうとして、適当な言葉が見つからないかのように、ただ無言で右手をあげて、人さし指と中指とを親指に擦りつけて見せた。その時あのギョロリとした眼が一種の潤いを帯び、ふてぶてしい頬に感に堪えぬような表情が浮かんだ。それを

見て我々はなるほど合点がてんが行ったのである。

また奈良の薬師寺の三尊について語ったとき、先生はいきなり、「あの像をまだ見ない人があるなら私は心からその人をうらやむ」というようなことを言い出した。そうして呆然あっけに取られている我々に、あの三尊を初めて見た時の感銘を語って聞かせた。特に先生が力説したのはあの像の肌の滑らかさであったように思う。あの像もまた単に色や形をのみ見るのではなくして、まさしく触感を見るというべきものである。それもただ銅のみが与え得るような、従って大理石や木や乾漆などにはとうて

い見ることのできないような、特殊な触覚的の美しさである。しかもそれが黒青く淀よどんだ、そのくせ恐ろしく光沢のある、深い色合と、不思議にびったり結びついていゝる。そういう味わいに最初に接した時の驚嘆——「あの驚嘆を再びすることができるなら、私はどんなことでも犠牲にする」。この言葉は今でも自分の耳に烙やきついている。先生は別にそれを強めて言ったわけでもなければまた特に注意をひくような身ぶりをもつて言ったわけでもない。が、その言葉には真実がこもっていた。そうして我々はまざまざとその味わいを会得することができた

のである。

こういうふうな仕方では我々はいろいろの味を教わった。自分はその時の印象によつてのほか岡倉先生を知らない。ひそかに思うに、あれが岡倉先生の最も本質的な面であつたのであろう。先生がインドにおいてどういふふうに独立を鼓吹したか、あるいは美術院の画家たちにどういふふうに靈感を与えたか、さらにまた五浦いづらの漁師たちをどういふふうに煽動して新式の網を作らせたか。それらのことについては自分は何も知らない。しかし先生が最もよき意味において「煽動家」であつたというこ

とは右の印象からも推測せられるであろう。

先生が明治初年の排仏毀釈の時代に多くの傑作が焼かれあるいは二束三文に外国に売り払われたかを述べ立てた時などには、実際我々の若い血は沸き立ち、名状し難い公憤を感じたものである。が、あの煽動は決して策略的な煽動ではなかった。我々のうちの眠れるものを醒まし我々のうちによきものを引き出すのが、煽動の本質であった。

これらの回想にふけるとき、岡倉先生の仕事が再び広く読まれることは、心から願わしいことに思われる。

日本文学電子図書館

「和辻哲郎随筆集」

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

1995年9月18日 第1刷発行

日本文学電子図書館